

山田洋次監督と吉永小百合さん

写真は「山田洋次 夢をつくる 19」(朝日新聞 7月8日)。大好きな吉永小百合さん登場なので抜粋して紹介したくなった。映画の写真は、『週刊朝日 MOOK』2015年8月15日から。



話は『男はつらいよ 柴又慕情』(1972年)誕生逸話からはじまる。「失恋した寅が冷たい雨に濡れて寂しく去っていく、というのがラストシーンかな」と僕が言うと、聞いていた渥美さんが「そこへスッと傘が差しかけられるというのはどうです。寅が振り返ると美女が優しく微笑んで、どうぞ、と言う。これが次の回のマドンナ」。僕は大笑いしながらそれは誰だろうと言ったら、渥美さんが「吉永小百合でしょう」という。僕は驚いた。脚本や配役について口を出すことは絶対しない彼が、そんな口をきいたのはあとにも先にもあのみときだけです。

この作品が超満員の劇場で封切りられてしばらくあと、小百合さんは結婚して日本中のサユリストをがっかりさせることになるのだけど、彼女が結婚を決めたのはロケ先で渥美さんと語り合ったことが大きく影響していたようです。

「小百合ちゃん、役者なんていつやめたっていいんだよ。自分の人生が大事なんだ、役者をやめたら自分でなくなるなんて考えちゃだめだよ」というようなことを言われて、そのとき結婚を決めた、という話を小百合さんから直接、僕も少々がっかりしながら聞いたものでした。



1年ほどの休養の後、『寅次郎恋やつれ』(74年)で再度マドンナに登場願

いました。それから34年後、映画『母べえ』で再会。日中戦争が激しくなった1940年に夫が治安維持法で逮捕され、家族ために暗い時代を懸命に生きる母親を演じる俳優は彼女しかいないと思った。表面的な演技では通用しない人間像だけど、彼女には戦前から戦後にかけての歴史的な認識を共有できるという信頼があった。戦後の育ちでも彼女はきちんと歴史を学んでいる。

その結果として、原爆詩の朗読会を通じて、反核を訴えるということをライフワークとして取り組んでいて、どんなところにも出かけていく。2011年、イギリスのオックスフォード大学から招待され、そのとき坂本龍一さんが伴奏者として同道し、それ以後心強いパートナーだったはずで、彼の死は小百合さんにとってどれほどの気落ちだろうか、どんなに哀しいかと思い、胸が痛むのです。

(2023年7月10日)